

僕たちがこの小屋にきて七日目の朝。  
マリーが外へ出てくると同時に、すべての作業が終わった。  
——道が、開いた。

「おはようございます」

「ああ。マリー、終わったよ」

「……はい、ありがとうございます」

開通した道を見つめたマリーは言葉をこぼす。

「私……魔女になりたくない」

早朝の冷たい風が、僕たちの間をすり抜けていく。

「どうして？ 君は魔女になるためにここにいるんだろう」

「だって、スミレは魔女のことをよく思っていないよね」

「それは……」

「いえ、今のは私が悪かったです。私が魔女にならない理由をスミレのせいにしたいわけじゃない。私は——」

(魔女になりたくない理由をあなたの言葉で述べてください)

「だから、逃げようと思うんです」

「そう、か」

「その、よかったらスミレも一緒に行きませんか？」





「……ごめん、僕は一人で行くよ」

「私はスマレと一緒にうれしいです……」

「……」

「スマレの料理が食べたい。スマレの絵を見ていたい。でも、これは私のわがままです」

「マリー……」

「そもそも、魔女の問題ですし巻き込んだじゃだめですよ  
ね」

僕はなにも言えなかった。

「スマレ。今までありがとうございました」

「僕のほうこそ」

「いつかまた会えたらご飯、作ってくださいね」

「ああ、会えたら、ね」

「どうか、どうか元気で」

「君は僕にかけられた魔法を知ってるだろう。……大丈夫だよ」

彼女に背を向けたが、一度だけ振り返る。

(マリーに別れを一言で告げてください)



僕の言葉を聞き、マリーは微笑んでいた。

これから長い長い人生がはじまる。

けれども、それはきっと自由に満ちているのだろう。







スマレを見送ったあと、荷物をまとめた私は走って逃げた。  
司祭はきっと、スマレが開いた道から来る。  
だから山の中を走って、走って、逃げたけれど。



「マリー様、見つけましたよ」

私は司祭たちに捕まった。  
女の足で逃げるには無理があったのだ。  
泣いて嫌がる私を押さえつけ、儀式が行われる。

いやだ、魔女になりたくない。  
そう思っている、肩の痣が熱く、体に魔力が巡るのを感じる。

「おめでとうございます、新しい魔女様」

——私は、魔女になった。  
はじめはスマレの境遇を思い返し、良い魔女を目指していた。  
けれども。  
私を無理やり魔女にした司祭たちが、憎くて。  
浅はかだった自分が、悔しくて。  
魔法を持つ者がおそろしいくせに、魔法に縋る人間たちが、  
愚かしくて——。





大都市の街路にあるベンチで絵を描いていた。

「マリーという名の魔女を知っていますか？」

隣に座ってきた女に尋ねられる。

僕は、キャンバスに運んでいた筆を止めた。

「その魔女がどうしたんだ」

「なんでも悪名高い魔女だとか。この前も村を一つ焼いた  
そうです」

「……そう、か」

マリーは逃げ切れなかったんだと、悟った。

あの日、魔女になりたくないと願った彼女の思いは切実なものだった。



僕はどうしたらよかったのだろう。

マリーの誘いを断ったときの表情を、時折思い出す。



不安で押しつぶされそうなマリーよりも、僕は、自由を取った。

何十年と絵を描き続け、ついには個展も決まった。

いまさらマリーに会ったって、僕にできることはきっとない。







女はいまだにマリーの噂話を繰り広げている。  
耳を塞ぐかのようにキャンバスに目を向け、再び筆を持ち上げたけれど——なにを、描きたかったんだっけ。

「雨が降りそうですね」

女の一声に空を見る。  
曇天の空は、まるで僕の心を表しているようだ。

「もう行くよ」

「あなたはスマイレでしょう？ 個展の開催が決まってる画家の……」

「ちがうよ」


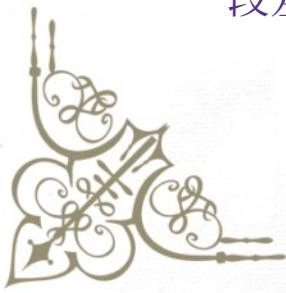
会話を長引かせたくなくて、嘘を言う。  
今はたのしい会話ができそうにないし、この人の話し方はマリーを思い出させる。

「いいえ、間違いないです。その絵のタッチは絶対——」

「それじゃあ」

「待ってください！」

画材をまとめて、キャンバスを持ち、早足でその場を去った。  
雨がぽつりと当たりはじめ、やがて視界が遮られるほどの大雨が降る。  
段差が見えず、足を踏み外し転んだ。





通りがかった人が僕に声をかける。

「大丈夫ですか!？」

まずい。

そう思ったときには遅かった。

擦りむいた手の傷が治るところを……見られてしまった。

「……ひっ」

ひきつった表情のまま、走り去っていく。

ああ、せっかく個展が決まったのに。

この街にも、もういられない。

僕は立ち上がり、ぐちゃぐちゃになった絵画をただ見下ろしていた。

ED2 【滲みだした絵の具の色は】

